

科目区分：中等教育コース（英語教育専攻）
授業科目名：英語コミュニケーション演習 1

教員に求められる英語コミュニケーション能力を身に付けるための取組

所属・氏名：英語教育講座 立松大祐

1. 授業の概要

本授業の履修者は 40 名で、その半数以上は小学校サブコースの 1 回生の学生である。次期学習指導要領改訂により、小学校 3・4 年生では外国語活動を行い、5・6 年生は英語を教科として学習することになる。したがって、小学校教員を志望する場合、英語で授業を運営できる程度の英語コミュニケーション能力を身に付けておくことが求められる。そこで、本授業では、個人活動・ペア活動・グループ活動を通して英語を積極的に使うことに慣れ、将来の外国語教員として必要なコミュニケーション能力の育成を図り、英語圏の文化や日本文化についてもある程度の知識等を得ることができるよう内容を構成した。

この授業の履修後、履修者は（1）英語の 4 技能のそれぞれの能力を育成することができる、（2）4 技能を統合したコミュニケーション能力を育成することができる、（3）教員として必要とされる基礎的な英語力を身に付けることができるようになることを到達目標として設定した。到達目標の達成を把握するため、3 回のパフォーマンステストを計画した。

1 回目は「Small Talk」であり、第 6 時間目を実施した。普段の授業ではテーマを決めてペアやグループで small talk（おしゃべり）を行っている。中・高等学校の英語の授業でも帯活動として行っていることも多くわれている。本課題においては、2～3 人組で 3 分間の活動を行った。2 回目は「Skit」で、第 11 時間目を実施した。skit とは短い劇・寸劇のことで、本授業においては、英語のイディオムを含むスキットを作成して 2～3 人組で発表した。最後は「Bibliobattle」で、第 14・15 時間目に行った。ビブリオバトルとは、本の紹介コミュニケーションゲームであり、5～6 人のグループになり、一人 2 分間で本を紹介し、それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に関するディスカッションを 2 分で行うものである。全発表が終了後、「どの本が一番読みたくなったか」を基準とした投票を参加者全員で行い『チャンプ本』を決定する取組である。これらの取組は多くの中・高の教室でも行われており、教員志望の学生は学

ぶ立場と指導する

英語のコミュニケーション能力を身に付けるためには、大量のインプットを継続的に取り込む必要があると同時に、アウトプットをする機会をもつことが必要である。また、評価の回数を多く設定することによって、無理にでも英語をアウトプットさせるようにした。いわゆる、「習うより慣れよ」ということである。

2. リテラチャー・サークルの導入

「習うより慣れよ」ということは、チェックポイントであるパフォーマンステストだけでなく、普段の授業においても当てはまる。英語の 4 技能を統合したコミュニケーション能力を育成するため、英語を意味のある文脈で使うための言語活動を取り入れた。リテラチャー・サークル（Literature Circles 以下 LCs）とは、学習者がある程度のまとまった分量の英文を読み、その内容について小グループで議論したり応答したりする活動である。この話し合い活動では、学習者はテキストの登場人物や出来事、テキストの内容から想起されたり関連付けられたりした読み手の経験や考え、さらには使用されている語彙や表現の工夫などについて、学習者主導で議論するのである。つまり、LCs とは協働学習であり、アクティブ・ラーニング型の授業とすることができる。

本授業では、5 人グループを形成して次の 5 つの役割を割り振った。学習者はそれぞれの役割に応じて英文を読み込み、話し合いのための準備を行った。

【5 人グループの役割】

Questioner/Discussion Director

Connector

Illustrator

Summarizer

Vocabulary Enricher

学習活動は概ね次の 5 つのステップに沿って行われた。

（1）「準備」

あらかじめ決められた読み物を読み、担当する役割に応じて話し合いへの準備を行う。家庭学習で行うこともある。

(2) 「ミニ・レッスン」

どのようにすれば話し合いがうまく進めることができるかなど、以前の活動を振り返るとともに、有用な表現をいくつか導入する。

(3) 「話し合い」

学習者主導で英文の内容をベースとした話し合いを行う。

(4) 「振り返り」

話し合い活動の振り返りを行い、達成したことや改善点を確認する。

(5) 「報告」

各グループの話し合った内容を報告する。

読み物は下記のものから、450 語程度から 800 語程度のものを選択した。選択した話題は、「差別や偏見」「友人関係」「ホームレス」「きょうだい」「命」「笑顔」「正直さ」など、どれも教員にとっては大切なものである。

Canfield, J. & Hansen, M.V. (1993). *Chicken soup for the soul: 101 stories to open the heart and rekindle the spirit*. Deerfield Beach, FL: Health communications.

Canfield, J., Hansen, M.V., Hansen, P. & Dunlap, I. (1998). *Chicken soup for the kid's soul: 101 stories of courage, hope and laughter*. Deerfield Beach, FL: Health communications.

今年度は、7回の実践を行い、グループは固定し、役割はローテーションできるようにした。記録用紙を用いて、役割、達成できたこと、課題、感想などを書かせるようにした。

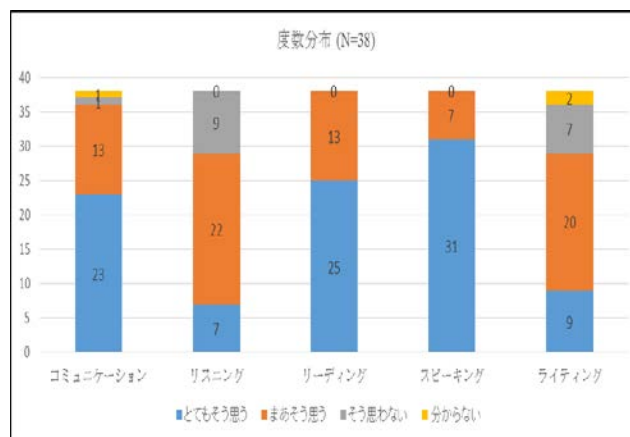
3. アンケート結果に見る学生の LCs への反応

LCs の授業を 7 回終えた 2016 年 6 月実施にアンケート調査を実施した (回答者 38 名)。ここでは、その一部の結果を報告する。

質問「LCs での学習を通して、英語のコミュニケーション能力、リスニング力、スピーキング力、ライティング力、リーディングが身に付くと思いますか。」(1「わからない」、2「そう思わない」、3「まあそう思う」、4「とてもそう思う」から選ぶ 4 件法での回答)。

グラフ 1 は技能ごとの度数分布を表したものであ

る。



グラフ 1. 各技能における学生の認知分布

学生は概ね LCs の学習を通して、英語コミュニケーション能力が身に付くととらえていることが分かった。技能別では、リーディングとスピーキングはその傾向が顕著である。リスニングについては、受講者同士の英語を聞いているので、ネイティブ・スピーカーや CD の音声を聞くことと比べると身に付かないのではと思っていることが任意のインタビューから分かった。

学生の LCs 学習についての感想は以下のとおりである。

【感想例】

・役割ごとにいろいろな観点から英文を読むことができたのでよかったです。他の人の英語の使い方や捉え方を知ることができました。

・グループで活動することで、他の人との考えを共有することができたのでよかったです。まとめの時間があって、他の班の意見を聞くことができたのがとてもよかったですと思います。

・これまでは文章を読んで終わりということがよくあったが、文章を読み自分が考えたことを述べるということで、話す能力や積極性を身に付けることができた。

・初めは難しくてなかなか英語で話せなかったが、自分の意見を英語で話そうとする姿勢が変わっていった。英語を使う機会が多かったので、力がつく活動だと思った。

4. 成果と課題

今年度の実践から、LCs は英語コミュニケーション能力を育成する可能性の高い言語活動であることが分かった。また、学生の自由記述からは英語の学習への動機付けが高まり、自律学習を促す効果も読み取ることができる。英文が短めであっ

たり理解しやすいものであったりの方が、話し合い活動が活発になる傾向が見られた。このことは、中・高等学校において教科書を主な教材として指導する際に示唆を与えるものである。題材の長さや話題の自己関連性に応じて、始めから LCs で学習することもできるし、教科書内容をある程度理解させた後に、LCs を行こともできるであろう。また、話し合い活動後、読んだ内容の感想や議論した内容についての書く活動を課すことでさらに技能統合型の活動とすることができる。

今後の課題としては、学習者の声を聞きながら、LCs 実践の手順や方法に改良を加え、学習者がさらにコミュニケーション能力が身に付き、自己効力感を得られるような授業づくりを目指したい。例えば、大学生への実践を続け、今年度実施したアンケートと同内容のものを実施し、受講者の認識を把握することが挙げられる。この分析を通して、語彙、文法の形式指導は必要であるか、また、そのタイミングは学習手順のどの部分が適切であるか、一斉指導による英文の内容理解はどこまで行うか、グループの役割に効果的な組み合わせはあるのか等を検証したい。さらに、英語の力が身に付いたことをどのように測るかについて、受講者の認識、パフォーマンステスト、外部試験以外の方法を探したい。

5. 「地域社会を核とした教育と研究のつながり」

受講者が将来教員になり、英語を担当する場面の想定を授業内容に反映させている。児童・生徒との英語によるやりとり、**small talk** などの基本的な言語活動、聞いたことや読んだことについての意見や感想を交換して議論をすることなど、指導者として必要になることの一部を授業で学ぶことができるようにしている。また、愛媛県教員採用試験においても英語での議論が課せられており、本取組を継続することにより対応する力が身に付くことが予想される。特に、LCs の取組を中・高等学校での教科書をベースにした授業に取り入れる方法を考え、学習指導のモデルを作ることは、地域で英語の教員になる可能性のある学生にとっては新しい教育技術を身に付けることができ、それは地域社会に還元できるものである。